

## 秋田県大潟村における博物館ボランティアの役割と課題

薄井 伯征

(大潟村干拓博物館)

### 【要旨】

秋田県大潟村の大潟村干拓博物館で活動している博物館ボランティア「大潟村案内ボランティア」について、発足後から現在までの過程を整理し、取り巻く課題と今後の役割について考察を行った。その結果、①干拓博物館を中核に、様々な場面で様々な手法により村の歴史を伝える組織になりつつある、②案内ボランティアの活動の趣旨を理解し、主に入植者世代からなる高い意欲の会員により活動が行われている、③案内する上で特定の会員への負担の偏りがある、ことが明らかとなった。そして、会の存続のためには後継者世代会員の入会の意識の継承が必要であること、来館者ニーズを満たすためのツアー客への対応の在り方、地域活性化のための様々なボランティア組織との連携の構築、が課題と考えられた。

### 1. 問題の所在

博物館<sup>1)</sup>のうち、「郷土博物館」「歴史博物館」は博物館全体の約6割に達している<sup>2)</sup>。これらの博物館では、立地している地域のあゆみや文化に関する資料が収蔵・展示されており、その地域の文化資源と情報が集積している。しかしながら、地方の公立博物館は、入館者数の伸び悩みと予算・人員の削減など、極めて厳しい運営を強いられているのが現状である<sup>3)</sup>。このような状況のなかで、博物館が地域に根ざし、利用者との間の望ましい関係を構築する手法の一つとして、博物館ボランティアの受け入れの意義が認められている<sup>4)</sup>。ボランティアを受け入れている博物館は2008年度の調査では34.5%に達し、これは1997年の調査と比べて約2.5倍となっている<sup>5)</sup>。博物館ボランティアに求める業務も、かつては「学芸業務の補助」「来館者接遇の補助」「博物館付帯活動補助」「環境整備」「事務業務補助」と類型化されており、なかでも「学芸業務の補助」が中心であったが<sup>6)</sup>、最近では来館者と直接接する「案内・説明・解説」といった業務にシフトしている傾向にある<sup>7)</sup>。すなわち、博物館ボランティアの受け入れと養成により、博物館の機能強化と博物館の利用の促進を両立させようと模索が続いているといえる。

その一方で、観光協会や自治体の商工観光部局においても、観光振興を目的とした地域住民による「地域紹介・観光ボランティアガイド」が組織化されつつある。東北地方6県の「地域紹介・観光ボランティアガイド」は213団体あり、その登録人数は5,308人にも達している<sup>8)</sup>。「地域住民が自らの言葉でふるさとを紹介する」ことは観光客に対して好評であり、地域住民が主体的に関わることが少なかった観光分野において住民参加の方法が創出され<sup>9)</sup>、地域の活性化に大きく寄与していると考えられる。

地域の文化資源と情報が集積する博物館では、それらを生かした情報提供と活性化は必須の機能であり、その博物館を支える地域の振興とも密接に関連している。そして地域住

民が主体となる博物館ボランティアの養成と活動支援は、博物館を支える地域社会と博物館との関係を密にし、信頼関係を構築する上でも重要である。さらに、地域住民の活動意欲を喚起し、「生きがい」「やりがい」を育むことは、地域住民による地域の活性化につながり、大きな意義がある。本研究では、秋田県大潟村の大潟村干拓博物館（以下、干拓博物館）を拠点に活動している博物館ボランティア「大潟村案内ボランティア」（以下、案内ボランティア）を研究対象とし、その特徴と活動を整理するとともに、案内ボランティアを取り巻く課題と今後の役割について考察を行う。

## 2. 干拓博物館の設立と博物館ボランティアの養成

秋田県大潟村は、戦後の食糧不足の解決と八郎潟湖岸地域の水害防止のため、当時日本第二の広さの湖であった八郎潟を干拓し、その湖底に1964年に誕生した自治体である<sup>10)</sup>。1967年から国により5回の入植が行われ、全国から580名とその家族が大潟村に入植した。以後、国とともに村づくりが行われたという特異な歴史的経緯をもっている。村の発足から30年以上が経過し、入植者の世代交代が進んできたことから、村では八郎潟干拓事業や村の建設・村立の意義と村の歴史を後世に伝えるため、干拓博物館を建設し、2000年4月に開館した。なお干拓博物館は大潟村教育委員会が管理・運営を行い、秋田県内で7番目の登録博物館である。

一般的に新設の博物館は、開館して2年目以降に入館者数が落ち込むケースが多い。大潟村の当時の人口は約3,300人であり、周辺自治体<sup>11)</sup>の人口も当時は約50万人と少ないうえ、公共交通機関も発達していないため、干拓博物館の開館初年度の入館者数の維持は困難と予想された。そこで魅力と特色のある干拓博物館を目指すべく、開館1年目の2000年度に干拓博物館協議会で協議が行われ、2001年4月に「21世紀を展望した大潟村干拓博物館の基本構想」（以下、基本構想）が策定された。この基本構想において、干拓博物館は「人が五感で感動し、考え交流する一つの連動体として機能すべき博物館」を目指すこととされ、村民の意識の反映や参画のもとでの企画展示・教育普及機能の充実と、その手段の一つとして博物館ボランティアの養成が提言された<sup>12)</sup>。すなわち、地域住民との協働により地域の歴史・文化資源の魅力を創出・発信するとともに、村の歴史を後世に伝えていく工夫が求められた。そこで干拓博物館では、養成する博物館ボランティアを「地域住民自らが八郎潟干拓と大潟村の歴史を学び、伝えていく」「博物館内だけでなく、村内全域を案内する」「様々な人々の学習支援を行う」ボランティアと位置づけ、開館2年目の2001年度に養成セミナーを開講した。セミナーは学芸員が進行役を務め、博物館の収蔵資料を用いて歴史的事項の振り返りや情報の共有をはかるとともに、ガイド案内の先進地視察を行うもので、募集定員10人に対して17人の申込みがあり、全員が受講した。2002年3月にセミナー修了生からなる「大潟村案内ボランティアの会」が設立され<sup>13)</sup>、同年の4月から事前申込み制による博物館内・村内の案内を中心に活動を開始した。

発足はしたものの、案内活動をする上での当面の課題は、案内ボランティアの知名度が低い中で案内する機会を確保すること、そして初対面の来館者に対する案内や対応のしかたであった。前者の課題に対しては、比較的少人数の予約した来館者に案内を行うなどの工夫をした。後者の課題においては、実際に案内する際に案内ボランティア会員から「ロベたでうまく話せない」「観光地もないのに何をどう話せば良いのか」「養成講座で学習し

た内容が覚えられない」などの意見が出された。そこで当初は役員を中心に学芸員といっしょに館内を案内し、いくつかの展示コーナーで話題提供を行うことにより、来館者とのコミュニケーションを図れるようにし、後に案内活動の経験を積んだ会員とペアを組むことにより、会員全員が案内活動の経験を積み重ねられるように工夫した<sup>14)</sup>。そして2002年度以降からは養成セミナーを参加しやすい夜に公民館で開講しており、新会員とともに既会員も参加し、歴史的事項の確認と会員相互の知識や情報の共有を図っている<sup>15)</sup>。

### 3. 案内ボランティアの活動

開館後の干拓博物館の入館者数の変遷を図1に示す。入館者数は開館年が75,279人と最大であり、2004年度から2008年度までは25,000人前後で推移してきたが、2009年度は約29,000人と増加した。2009年度に増加に転じた理由は、高速道路料金の引き下げの効果により遠方からの来館者が増えたこと、及び大手旅行代理店のツアー客の増加によるものである。

入館者数（人）

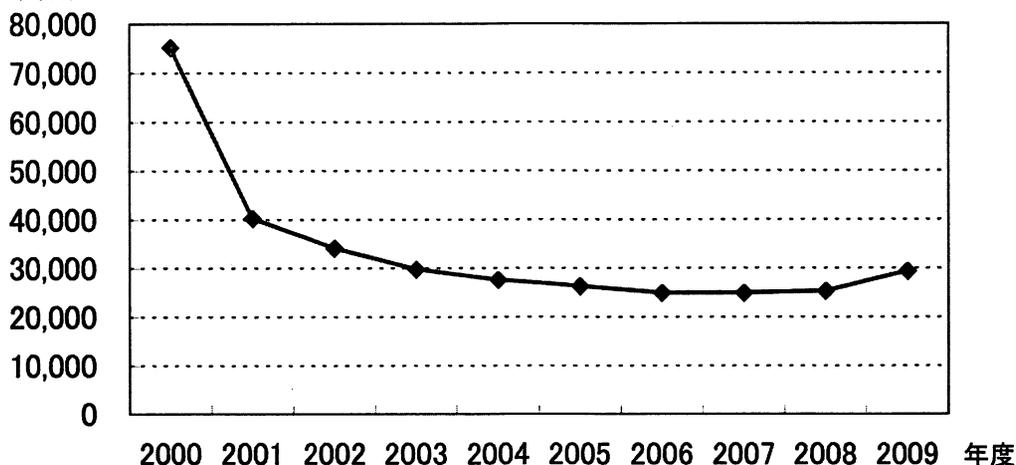


図1 干拓博物館の入館者数の変遷

案内ボランティアの活動の変遷を表1に示す。案内ボランティアの会員は、退会者はいるものの、みかけ上毎年2・3名ずつ増え続けていた。2007年度以降は会員が増えない状態が続いていたが、2009年度に既会員が積極的な呼びかけを行い、新たに4名が加入し、2010年度は26名の体制で活動を行っている。会員の平均年齢は、表1に示したように上昇傾向にある。案内ボランティアの会の発足後、新たに加入したボランティア会員は、入植者世代がのべ13人で年齢は58～80歳であり、入植者の後継者世代と農家でない人はそれぞれ1人が入会したのみであった。案内件数は、年度ごとに変動が大きいものの、発足当初と比べて大幅に増加しており、2005年度以降は年間70回以上に達し、案内ボランティアが案内した人数も年間約1,700～3,500人に上っている。特に2008年度以降は案内人数が3,500人以上に増加しており、博物館の入館者数の1割以上に対し、案内ボランティアがガイド案内を行うまでになった。また、案内の申込みのうち、およそ1/4～1/3は博物館だけでなく村内も含めた案内を希望しており、案内ボランティアは申込者のニーズに対

応じた案内活動を行っている。

表1 案内ボランティアの活動の変遷

年度	会員数 (人)	会員の年齢※1			案内件数 (件)	案内人数 (人)
		平均	最小	最大		
2002年	17	58.6	29	73	16	300※2
2003年	19	60.3	30	74	23	400※2
2004年	21	61.6	31	75	50	1,479
2005年	23	62.0	32	76	72	1,860
2006年	26	63.5	33	77	82	2,068
2007年	22	63.5	34	78	72	1,695
2008年	22	64.5	35	79	97	3,515
2009年	22	64.4	36	80	132	3,567
合 計					544	14,884

※1 会員の年齢は各年度4月1日現在の年齢を示した。

※2 概数である。

2006年度になると役員が活発に活動し、後述する公開講座の開講、会員どうしの連絡体制の整備、研修の充実などが行われた。2008年度の途中からは、会員の案内活動を今後の反省に生かそうと「案内ボランティア日誌」を設け<sup>16)</sup>、案内終了後にできるだけ案内の状況を記録し、他のボランティアの案内の参考になるようにしている。さらに、案内ボランティアが話し合い、ガイドマニュアル「博物館案内編」「村内案内編」をそれぞれ2008年度、2009年度に作成した。マニュアルは厚いものではなく、博物館内の展示や村内の案内スポットの写真と最低限の説明事項及び主な質問に対する回答を簡潔に記したもので、会員はマニュアルに記載された事項をもとに説明を行い、来館者に応じて内容を膨らませて案内する形となっている。

案内ボランティアの活動は、主として村外から村に来る方を対象とした案内活動であるが、2006年度以降は地域住民向けの活動も、干拓博物館と連携して行われるようになった。2006年には、地域住民や来館者向けに特定のテーマについて講師を招聘したり、移動研修を行う「案内ボランティア公開講座」を開講し、以後公開講座を年2～4回開催するようになった<sup>17)</sup>。2006年度からは、大潟中学校、干拓博物館、地域住民の学社融合により、村の歴史を後世に伝えるための教育教材開発事業を実施しているが、この事業においては、中学校の授業時間中に案内ボランティアが生徒に対し、大潟村の歴史指導を行っており<sup>18-22)</sup>、現在も継続している。また、博物館の企画展示事業や村主催の事業においても、その事業を一層充実させるため、案内ボランティアに村の歴史の説明を求める機会が多くなっている。例えば毎年2月中旬に行われる大潟村産チューリップに関する企画展においては、バスでチューリップ栽培ハウスを巡るツアーが行われるが、バスに案内ボランティアが同乗し、村の歴史や村とチューリップの球根を輸入しているオランダの関わりなどを紹介している。村でも村外の児童を一定期間村内の農家にホームステイさせ農村体験を行う「子ども農産漁村交流プロジェクト」や「大潟村農村生活体験事業」を実施しており、博物館で開講式が行われ、案内ボランティアが村の成り立ちと農家の人たちの生活を紹介すること

から事業が始まる。

このように案内ボランティアは、発足後8年が経過し、一定の会員数を確保・維持し、干拓博物館の来館者や各種事業の参加者を対象とした、博物館を起点とする村内全域のガイド案内システムを確立できた。また住民向けには、小・中学校における学習支援や公開講座の開講により、村の歴史を伝えるシステムの確立を目指すべく模索中である。博物館を中核とし、博物館に限らず様々な場面で、様々な手法により、村の歴史を伝える組織と変貌を遂げつつある。

#### 4. 考察

##### (1) 案内ボランティアの活動の意識と課題

発足時の案内ボランティア養成セミナーには、募集人数10人に対し17人が申込みを行った。その内訳は、入植者世代が12人、入植者の後継者世代が3人、農家でない方が2人であった。申込みの動機は、入植者世代は「館内の展示物を見て感じたことは、入植者の苦労があまり伝わってこないということでした。入植初期はたくさん話題や経験があり、村へ来て下さるたくさんの方々に聞いていただきたいと思ったのが入会の動機なのです」「八郎潟干拓事業が計画されてから20年もの年数がたちました。戦後の食糧難から米余りの時代に、減反政策が大潟村にも課せられました。そこで起きたのが過剰作付け、ヤミ米騒動です。まるで大潟村が、村ぐるみで行われているように世間に伝えられていることに心をいためておりました。そのことを正確に伝えること、また入植当時の思いと現状を後世に伝えていくことが入植1世のつとめと思い、いの一番に申し込みました」に代表されるように<sup>23)</sup>、大潟村の歴史や農業の現状を来館者に自ら伝えたいという強い意識を持っている人が大半であった。一方後継者世代や農家でない方は、積極的に博物館等で案内を行うためというよりはむしろ、八郎潟干拓や大潟村の歴史を学びたいという学習意欲をもった申込みであった。

表2に案内ボランティアの入会者数・退会者数の変遷を示す。発足後8年間で案内ボランティアの会員数は見かけ上は増えているが、実際は2003年度から2009年度までの間に、のべ10人が退会し15人が加入している。退会の理由は、入植者世代は高齢や健康上の問題、後継者世代及び農家でない方は仕事等のため活動に参加できないことが主なものであった。また、退会した10人のうち9人は発足時からの会員であった。一方、入会した15人のうち13人が入植者世代であり、後継者世代と農家でない人はそれぞれ1人しかいない。表には示していないが、2010年から新たに活動する4人も全て入植者世代である。また、2003年度以降に入会した15人のうち、今までに退会した人は1人のみであった。

これらのことから案内ボランティアは、発足して案内活動が活発になるにつれ、健康や仕事の理由等で活動できない人たちが退会するとともに、案内ボランティアの活動の趣旨を理解し、主に入植者世代からなる意識が高い人たちにより、活動が維持されるようになったと判断できる。また、発足後8年で会員の平均年齢が約6歳上昇しており、徐々に高齢化が進んでいる現状が明らかとなった。会員の高齢化は他のガイドボランティアに共通する問題であるが、案内ボランティアの会では後述するように高齢でも健康で活動も活発であり、会員の高齢化を大きい問題ではないととらえている<sup>24)</sup>。しかしながら今後5年、10年先を見据えれば、案内ボランティアの活動の維持には後継者世代の入会は欠かすこと

ができず、さらに入植者世代の意識や意欲の継承が求められる。既会員に対しては提示しにくい課題ではあるが、今後数年をかけ、具体的な勧誘手法と継承手法を検討していく必要がある。

表2 案内ボランティアの入会者数・退会者数の変遷

年度	入会者 (人)	退会者 (人)	会員数 (人)
2002年	17	0	17
2003年	2	0	19
2004年	2	0	21
2005年	4	2	23
2006年	4	1	26
2007年	1	4	22
2008年	0	0	22
2009年	2	2	22

## (2) 案内ボランティアによる対応の成果と課題

図1に示したように、干拓博物館の入館者は2003年度以降、約25,000～30,000人で推移している。そしてここ2年は博物館入館者の1割以上に対して、何らかの形で案内ボランティア会員が対応している。案内ボランティアの申込者は、大手旅行代理店が関わる観光地巡回型のツアー客よりはむしろ、大潟村や農業に関心がある個人・グループや団体が多い。例えば2009年度の132件の申込のうち、いわゆる大手旅行代理店の募集により干拓博物館が各観光地を巡るツアーに組み入れられた件数は39件であり、他は代表が直接、あるいは旅行代理店を通して案内の申込みが行われていた。これらの申込者は村外の児童・生徒のほかには農家や農業関係の団体も多い。申込者の中には、申込時に特定の会員を希望するケースもある。

2009年度の132件の申込みを詳細に分析してみると、1件あたりの来館人数は、1人(のべ5回)から218人までと幅広く、平均では1件あたり27人であり、100人以上の団体入館は2件であった。これらの申込みには、のべ160人以上<sup>25)</sup>の案内ボランティア会員が対応していた。申込みに対し、誰が何回対応したのかを調べたところ、20回以上が3人、10～19回が4人、9回以下が15人と、特定の会員に対応が偏っていることが明らかとなった。10回以上対応した7会員の平均年齢は、2009年4月1日現在で70.4歳であった。会の平均年齢を6歳も上回っており、案内ボランティアとしてのキャリアを積んだ高齢の会員の負担が増えている結果となった。しかしながらこれらの会員は高齢とはいえ、若い頃から農業を行っており強靱な体力をもち、年齢相応には見えない方ばかりである。案内回数が多い会員に対して、負担になっていないかと筆者がたずねたところ、「ガイドを苦痛に感じない」「毎日やってもかまわない」「案内ボランティアが生き甲斐」などの答えが返ってきた。また、ボランティア日誌によれば、「(案内ボランティアの)話を良く聴いてくれた」「(来館者が)熱心だった」「(来館者が)活発な質問をしてくれた」など、積極的な来館者の感想を書いたケースも多くみられる。これらのことから、対応件数が多くても、案内活動に対して一定の満足感や充実感を得ていることが推察される。

案内ボランティアの発足後8年が経過し、干拓博物館を起点に「八郎潟干拓と農業」を説明する案内活動が広く認識され、多くの方々が案内ボランティアを通じて村の情報を得ようとしている。案内ボランティアにとっては、村に興味関心がある来館者に対する案内は比較的満足しうるものであり、高いモチベーションの持続につながっていると考えられる。さらに、申込者が特定の会員を希望するケースもあることから、案内ボランティア会員が利用者から高く評価されるようになったと判断できる。これは干拓博物館及び大潟村への誘客に大きく寄与するとともに、八郎潟干拓と大潟村の理解に大きく貢献するものである。また、目的をもった申込者は、村内の滞在時間が比較的長いいため、博物館に隣接する農産物直売施設「産直センター潟の店」で買い物をしたり、村内のホテルで昼食を取るケースもみられ、村の経済的な活性化にも寄与していると考えられる。

その一方で、大手旅行代理店主催のツアー客に対する案内活動には課題がある。これらのツアーは広く参加者を募るため、参加者の興味関心に大きな幅がある。2009年の大手旅行代理店のツアーは39件であり、博物館内のみの案内がほとんどで、しかも滞在時間は30～40分と短いものであった。2009年7月には、そのツアーを企画する旅行代理店のスタッフが下見に訪れ、案内ボランティアの会の会長が対応したが、「(スタッフが)若い人たちで関心の持ち方が一般の観光客と少し違っていた。面白い、面白くないかがハッキリしていた」と日誌に記しており、対応する上でのとまどいを感じられる。実際にツアー客に対応した案内ボランティアの感想はさまざまで、「人数が多かったが静かに聞いてくれた」「質問も良く出た」「大潟村を初めて見る人々で説明に熱心に聞き入っていた」「大潟村へ来てみたかったという人が多かった」など、好意的に受け止めているケースがある一方で、「博物館の訪問を知らない人がいた」「添乗員と打ち合わせができれば良かった」「すぐ終わった」など、案内することの充実感が得られていないケースもあった。

2009年度に限らず、ツアー客への対応では、来館時の客層が判断できなかつたり、案内を最後まで聞く人は数人というケースもあるなど、案内する上で難しい局面が見受けられている。また、秋田の言葉がわかりにくいという意見も寄せられた。大手旅行代理店は、いわゆる「ホスピタリティ＝おもてなしの心」の向上を求めているが、その心がツアーで訪れる来館者には十分に伝えられていないケースがあると考えられた。また、これらのツアー客の心ない反応により、案内ボランティアの活動意識や意欲に影響を与える可能性もあり、今後、案内ボランティアが活動を行う上での制限要因となる可能性がある。興味関心が薄い来館者に対し、案内活動をどのように工夫し、そしてどのように思いを伝え、八郎潟干拓や大潟村の思い出を持ち帰っていただくのか、大きな課題のまま残されている。

### (3) 他のボランティア組織との連携の必要性

前述したように、現在、地域の歴史や文化を案内・紹介するガイドボランティアが各地に多数存在しており、ここ数年の活動は活発である。これらのボランティアは、主に観光客を対象とする「地域紹介・観光ボランティアガイド」のほか、美術館・博物館等で案内等を行う「文化ボランティア」、農山村地域で農村生活体験を支援するボランティアなど、多分野にわたり存在しているが、これらのボランティアガイドどうしの横の連携は不十分と言わざるを得ない。現在、秋田県内の「地域紹介・観光ボランティアガイド」に限っては、秋田県観光協会の主催で総会・合同研修会が年に1回、地区別の交流会が年に3回程

度行われている。合同研修会に参加する際の事前アンケートでは、案内ボランティアの会は意見として「観光立国、観光立県をめざす上で案内人の役割がますます重要になることから、地位や認知度の向上、スキルアップを強力に推進するという立場で、県や観光協会による様々な形での積極的な支援を望みます。また、生涯学習や文化財との関連から、教育部局も一体となった取り組みが必要と思います」と回答しているが、加盟する各組織の連携基盤の構築や共通した受け入れ体制の整備、ガイドの地位の向上、地方のガイドのホスピタリティのあり方など、具体的かつ積極的な事項を検討するまでには至っていない。また、それぞれの地域で活動するボランティア組織の支援においても、その所管部署が首長部局や生涯学習部局、観光協会などさまざまであり、さらにそれぞれのボランティア組織の発足の経緯が異なっていることもあり、温度差があるので足並みが揃にくいのが現状である。

特定の地域に興味関心のある訪問客を、その地域の住民が紹介・案内する活動は、訪問客及び地域住民双方にとって大きなメリットがある。訪問客にとっては、その地域の歴史や伝統、文化、生活、食、自然などについて、肌で感じたり体験することができる。地域住民にとっては、興味関心がある人たちの存在を知り、そして自らが地域の情報を発信することの意義を理解し、新たな主体的活動へとつながる。すなわち、その地域の活性化に大きく寄与すると考えられる。興味関心のある方を対象に、それぞれの地域で案内活動を行うボランティアが相互に連携し、ツアーメニューの構築や観光客の相互誘客を図れるのであれば、自分たちの地域では不足している要素を他地域と連携することで補え、来訪者にとってメリットとなる。また、各地域の地域振興・活性化にもつながるであろう。そのためには、各地域のボランティア組織を総合的に支援する組織や部局が県レベルで必要であり、かつ縦割りとなっている支援部局間の関係構築の検討が求められている。

## 5. おわりに

大潟村と隣接する男鹿市・潟上市の地質文化遺産を保全し、教育や地域振興に資する目的で「男鹿半島・八郎湖ジオパーク<sup>26)</sup>」の認定を目指そうと、男鹿市・潟上市・大潟村ジオパーク推進協議会が2010年3月に設立された。協議会には、大潟村、大潟村教育委員会とともに案内ボランティアも加盟している。認定には、地質遺産の環境整備のほか、地域住民の参画による、教育的視点に立って訪問者の受け入れや案内・解説手法の確立、及び地域活性化の施策の提案が必須である。認定後の村における教育普及活動の中核を担うのが干拓博物館と案内ボランティアであり、ジオパークとしての視点を加味した案内や情報提供の創出が求められる。また、エリアが2市1村にまたがるため、案内ボランティアとは県を含めた広域的な連携が必要と予想される。自治体の垣根を越えた連携の構築や活動は、案内ボランティアの意識や意欲の一層の醸成につながるとともに、より広域的な教育普及と地域振興に寄与するものであり、その在り方について検討を重ねていきたい。

## 引用・参考文献及び註記

- 1) ここでは、登録博物館、博物館相当施設、博物館類似施設を博物館として取り扱う。
- 2) 財団法人日本博物館協会『日本の博物館総合調査研究報告書』、pp.12-14、2009
- 3) 2008年に全国の博物館4,035館を対象に日本博物館協会が行った博物館総合調査によれ

ば、回答館 2,257 館の半数以上で予算の削減を回答しており、また回答館の約 4 分の 1 は年間入館者数が 5,000 人未満と回答している（財団法人日本博物館協会『日本の博物館総合調査研究報告書』（2009 年））。

- 4) 大木真徳「博物館運営におけるボランティア受け入れの意義と課題」（『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』13、pp.1-8、2009）
- 5) 財団法人日本博物館協会『日本の博物館総合調査研究報告書』、pp.41-43、2009
- 6) 財団法人日本博物館協会『博物館ボランティア導入の手引』、pp.72-76、1995
- 7) 財団法人日本博物館協会『日本の博物館総合調査研究報告書』、pp.98-116、2009
- 8) 社団法人日本観光協会『地域紹介・観光ボランティアガイド組織一覧〔2009 年度版〕』、pp.6-27、2009
- 9) 加藤真理子・下村彰男・小野良平・熊谷洋一「地域住民による観光ボランティアガイド活動の実態と動向に関する研究」（『ランドスケープ研究』66(5)、pp.799-802、2003）
- 10) 行政面積 170.05km<sup>2</sup>、人口 1,029 世帯 3,309 人、保育園・幼稚園・小学校・中学校各 1 校、公民館・博物館・体育館各 1 施設（全て 2010 年 4 月 1 日現在）
- 11) 現在の秋田市、男鹿市、能代市、潟上市、井川町、八郎潟町、五城目町、三種町。
- 12) 大潟村干拓博物館協議会『21 世紀を展望した大潟村干拓博物館の基本構想』、pp.1-12、2001
- 13) 案内ボランティアの会則では、会の目的を「大潟村民及び大潟村を訪れる人々に、八郎潟干拓事業や大潟村の歴史、農業、自然を紹介するため、適切な案内と解説を行い、大潟村を全国で紹介する懸け橋となり、併せて会員相互の研鑽と親睦を図ること」と定めており、この目的を達成するために、大潟村の案内と解説、児童生徒ならびに学生の学習支援、会員の学習会及び研修の開催、干拓博物館の事業等への協力を行うこととしている。
- 14) 薄井伯征「博物館ボランティアの養成・活動支援とミュージアム・リテラシー -秋田県大潟村における実践から-」（『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』14、pp.29-35、2010）
- 15) 新規加入者がいない年度は開講していない。
- 16) 依頼者、案内者、案内日時のほか、案内した場所、来館者の様子や感想、気づいた点などを記録する。
- 17) 前掲書 14
- 18) 薄井伯征「学社融合による地域の歴史を後世に伝える教育教材の開発と生涯学習支援上の課題 -『大潟村歴史かるた』づくりを通して-」（『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』29、pp.113-129、2007）
- 19) 薄井伯征「秋田県大潟村における学社融合の実践に関する一考察」（『日本生涯教育学会論集』29、pp.201-210、2008）
- 20) 薄井伯征「学社融合と教材開発」（『社会教育』64(1)、pp.30-34、2009）
- 21) 薄井伯征「学社融合のマネジメントに関する研究 -秋田県大潟村における実践から-」（『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』31、pp.161-177、2009）
- 22) 薄井伯征「秋田県大潟村の学社融合の実践に関する研究 -3 年間の教育教材開発の成果と課題-」（『日本生涯教育学会論集』30、pp.53-62、2009）
- 23) 「八郎潟の干拓と大潟村の歴史」ホームページより (<http://cs.ogata.or.jp/~museum/>、

2010年4月20日参照)

24) 平成21年度に行われた秋田県観光案内人合同研修会の事前アンケートによれば、「会員が高齢化については大きな課題ではない」と回答している。

25) 132件中、8件の申込みの記録がないため推定した。

26) ジオパークは、地域の地史や地質現象を理解できる地質遺産が含まれる公園であり、自治体等の公的機関や地域社会などによる運営組織をもつ。この組織により地域の持続可能な社会・経済発展を育成するとともに、地球科学や環境問題に関する教育・普及活動を行うことをねらいとしている。